

# 『ヒロシマ』というセンセーショナルなテクストと米国の社会的コンテクスト

—1945年8月6日〜1946年8月31日—

永川 とも子

1 『ヒロシマ』は本当にアメリカの眼を「変えた」のか？

1999年、ニューヨーク大学ジャーナリズム学部の教授陣、及び報道関係者達によって「20世紀における最も重要な報道記事」の選考が行われ、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を抑え第一位となったのは、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』であった。後の選評によると、『ヒロシマ』の首位決定はほとんど異論の余地のない結果であったという<sup>①</sup>。首位となったこの『ヒロシマ』という作品に関し、際立った特徴点としては、発売当日において即座に沸き起こった社会に対するインパクト、市場における過剰なまでのレスポンスが挙げられる。本作品発表とその後におけるセンセーションの一連の経緯については、これまで多くの論文の中

で紹介されてきたため、本論ではリフトン・ミッチェルによる説明を付与しておくに留めたい。以下は、『アメリカの中のヒロシマ』(Hiroshima in America, 1995)からの引用である<sup>②</sup>。

八月末、ニューヨーカー誌の最新号が到着した時には、他の号と変わりなく見えた。カバー写真は一般的なピクニックの光景を扱っていた。だが、購読者はすぐ、この号はちよつと変わっていることに気づいたにちがいない(中略)雑誌の全部が、68ページにわたる「ヒロシマ」と題された読み物にあてられていた。それは三一歳の若さながら、小説『アドノの鐘』ですでにピューリッツァー賞を取った戦争特派員ジョン・ハーシーが書いたものだった(中略)この記事は、すぐに大きな反響を呼んだ。町の売店では、雑誌はすべて売り切れた(中略)ABCラジオ放送網は、全部で三万語もある物語を四夜連続で朗読し、放送した。聴衆からの要求で、多くの放送局はそれを再放送した。ニューヨーカー誌には追加注文が殺到し、アルバート・アインシュタインは千部欲しかった。コラムニストや編集者はその大多数が原爆投下に強い支持を表明していたのだが、にもかかわらず記事を賞賛し、多くは当時最良のルポルターージュと呼んだ。(『アメリカの中のヒロシマ』118-121)

ここで述べられているように、『ヒロシマ』が被爆者の「人間的側面」へフォーカスしたことによって米国民の共感を呼び、被爆地／被爆者への眼差しを変貌させたという見方は、これまでの多

くの先行研究において成されてきた。こうした主張の多くは、1945年8月〜1946年8月にかけて米国社会に送り出されてきたナラティブのうちほとんど全てが、被爆地を十分に描写してこなかった、あるいは、被爆者の生をあぶりだしてこなかったことを引き合いに出し、その反面でハーシーテクストの持つ人道性や人々の共感を得たのだと結論付ける<sup>(3)</sup>。また、『ヒロシマ』では被爆者に対し米国民が共感的感情を持つことを誘発するような描写が採用されており、日本人を黄禍的な野蛮民族としてではなく、人間として描き出した点にこそ、本テクストの功績があるのだと指摘されてきた<sup>(4)(5)</sup>。つまりこれらの主張に依拠すれば、『ヒロシマ』は突然発生的であり、被爆者の視点から原爆投下を語るることによって米国民を「啓蒙した」ということになる。

しかし、ここに一つの重要な問題を提示したい。1946年8月、すなわち、米国のメディアにおいて被爆地報道が一応の終息を迎えていた時期に、広島原爆を題材にした作品がなぜそれほどの話題性を持つに至ったのだろうか。そして何よりも、米国民の被爆地／被爆者を視る眼を「変貌させた」最初のきっかけが『ヒロシマ』であったと本当に言うことができるのだろうか。筆者がこのように考える根拠として、『ヒロシマ』に混在する「相当量のリアリズムの要素」を挙げたい。『ヒロシマ』はヒューマンレイ重視のテクストである点がそれまでの被爆地ナラティブとの決定的な差異だとされているが、実際には相当数のリアリズム的要素も混在している。例えば下河辺美智子は、原爆投下後広島島の街をさまよいつく歩く重傷者達の描写が「ヒューマンイズムのモラルから逸脱しかねない生々しさ」であると指摘しているが<sup>(6)</sup>、それは例

えば以下のような箇所においてであろう。

砂州には二〇人ばかりの男女がいた。谷本氏は岸辺に漕ぎつけて、速く乗れとせきたてたが、誰も動かない。なるほど弱り果てて立つこともできないのだ。谷本氏は舟から降りて、一人の婦人の手をとると、その手の皮が、大きな手袋の型に、ずるりとむけた。氣持が悪くなって、しばらく尻もちをついていたが、今度は水のなかに入ってしまった。小男のくせに、谷本氏は素裸の男女を何人か舟のなかにかつき込んだ。どの人の背中也胸もねちやねちやする。その日一目見た大きな火傷のありさまをふと思い出して、いやな氣持がした。(中略)「これはみんな人間なんだぞ」と、何度も何度も、わざわざ自分にいいきかせなれば、とても我慢ができた。  
(五十九頁)<sup>(7)</sup>

この箇所ですら読者に強烈な印象を残しているのは、重傷者に救いの手を差し伸べる谷本のヒューマンレイに富んだ姿というよりはむしろ、断末魔の苦しみを訴える無数の重傷者達を前に、抗うことのできない不快感を覚える谷本の姿と、地獄絵のようなおぞましいほどの現実描写である。クラインゾルゲ神父の視点から見た被爆者の姿についても、同様のことが言える。彼は水を汲みに行つた先の橋の上で「全裸の女性」の側を通り過ぎるが、この女性は「頭からつま先までやけただれており、全身が赤く腫れ上がった」という。その直後には、20人ほどの男性の群れと遭遇するが、彼らは一様に「顔が完全に焼けただれ、眼窩から溶けた目

が流れ出てそれが頬を伝っていた」<sup>(8)</sup>。クラインゾルゲ、あるいは谷本が語るところの被爆者達の姿は、「読者が」被爆者を人間として認識させるよう仕向ける手法」<sup>(9)</sup>であるというよりもむしろ、読者あるいはクラインゾルゲとの「差異」を決定的なものとする見方の方を誘発するように思われる。

このように、テキスト中には非常に濃厚なリアリズムの要素が点在しており、またそれらは読者との差異を顕著にするような描写であるにも関わらず、『ヒロシマ』はヒューマニティに富んだテキストであり、それ故に読者の共感を呼び起こしたとする主張には疑問が残る。先述のように相当数のリアリズム的描写までもがヒューマニスティックな描写と同様に混在していることを考慮すれば、『ヒロシマ』が読者から共感の念を持つて迎え入れられたという事実を、そして被爆者が「米国人読者と同様に人間的で、痛みを感じる存在」として認識されたという事実を、我々は如何に理解すれば良いのだろうか。

以上の点を考慮し、筆者は以下の点を主張したい。それはこの『ヒロシマ』という作品が米国において持った意味合いは、作品単独のみによつて規定されるのではなく、1945年9月～1946年8月の間にかけ、米国社会に送り出された被爆地に関する現地ルポルタージュ、手記、声明を抜きにして語ることはできないのではないかと一点である。すなわち、『ヒロシマ』は突発的に出現し、センセーションを巻き起こしたというよりも、発表以前にこの作品を受け入れる必然的な土台が米国社会に存在しており、書き手と読み手の需給関係が完全に合致した結果だと考えるのが妥当である。これらの土台があったからこそ、1946年8

月時点で米国民は『ヒロシマ』を通じ、被爆者の痛みから自らの身体を重ね合わせることができたのではないだろうか。ジョン・ハーシー自身は『ヒロシマ』を執筆する際、読者を作品に引き込むための効果的な手法を先行するテキストから学び取っていたことが明らかになっている。代表的な文献としては、Thornton Wilderの *Bridge of San Luis Rey* やドイツ人神父で広島原爆被災者の John A. Siemas の被爆地手記<sup>(10)</sup>、そしてUSSBS報告などがある。一方で、『ヒロシマ』に対するリーダー・レスポンスは如何にしてもたらされたのか、その経緯や、『ヒロシマ』とその発表直前の米社会における被爆地テキストとの関連性については、これまで詳細に分析されてこなかった。『ヒロシマ』とその発表後における米国人の原爆観との関連性をリーダー・レスポンスの観点から論じた研究としては、M・ヤベンディッティの論文に詳しい<sup>(11)</sup>が、『ヒロシマ』が大多数の読者に「共感をもつて」「肯定的に」受け入れられた背後に如何なるコンテキストが存在していたのか、という問題点については未だ議論の余地があるように思われる。そのため本論では、広島への原爆投下～1946年8月までの間に米国社会において発表されたフィリップ・モリソン (Philip Morrison)、ルイス・マンフォード (Lewis Mumford)、キリスト教会連立協議会 (Federal Council of Church) によつて発表された論考／報告を検証し、それらがアメリカ国民が被爆地／被爆者へ向けるまなざしに如何なる影響を及ぼしたのかという点を主題とする。

まず、1945年9月時点における被爆地テキストの中で描かれた被爆地／被爆者を、ハーシーが1年後に『ヒロシマ』の中で描いた被爆者／被爆地と比較検討し、これら2つのナラティブの

間で、被爆地／被爆者表象がいかに変遷しているか、その差異を明確にする。さらに、この1945年9月と1946年8月という時間的地点の間に存在する複数のナラティブ、すなわちモリソン／マンフォード／FCCによるテクストを分析することで、それらがアメリカ社会の中で如何なる世論・土台を形成したのか、その可能性についての検証を行う。その上で、『ヒロシマ』が、モリソン／マンフォード／FCC声明の延長線上にあるテクストであるという点に着目し、アメリカにおいて被爆者の苦しみに向けられた「まなざし」が如何なる経緯を経て『ヒロシマ』へと受け継がれたのか、という点を考察する。以上の点を検証することで、1945年と46年という核の萌芽の時代において、アメリカ国内で被爆地に対する如何なる特徴を備えたナラティブが出現し、それらが「被爆の痛み」に対する国民の意識形成にどう作用したのか、という点を説明することが本論の最終的な目的である。そのため、本論にて扱うテクストは『ニューヨーク』や『ニュー・リパブリック』、また『ニューヨーク・タイムズ』といった主要紙に掲載され、アメリカ社会に重大なインパクトを与えたと思われる新聞記事・声明を基礎としている。

## 2 被爆者へ向けられたピガート／ローレンスのまなざしからハシーのまなざしへ——その変遷と差異——

広島・長崎への原爆投下からわずか1ヶ月の間に被爆地入りし、現地ルポを執筆したアメリカ人報道関係者は、10数名に及ぶという事実は近年、繁沢敦子氏の研究によって明らかになって

いる<sup>(1)</sup>。彼らの寄稿した被爆地ルポルターージュが事実上、全米第1号の被爆地を伝えた公式なナラティブということになる。書き手の多くは、GHQによって選抜された報道業界を代表する記者達であった。世界的に一大事件をスクープするといういわば特権を与えられた彼らではあったが、検閲を始めとする制約が課されていた。そのため、彼らの内多くは被爆地における物的被害の描写を優先している者が目立つが、それでも中には、意識的ではなかったにせよ、結果として被爆地の人的被害の方に光を当てることとなった者もいた。そのうち1人は、「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」紙の専属記者であったホーマー・ピガート(Homer Bigart)である。彼は被爆地ルポを書く以前にも、太平洋戦争に関する記事を寄稿し続け、大戦後の1950年代には朝鮮戦争を取材、後にこれら二つの戦争に関する一連の記事によって2度のピュリッダー賞を受賞している。その他にも、1950年代、60年代のグアテマラ内戦、1961年のアイヒマン裁判、あるいはベトナム戦争など数々の歴史的に一大事件の現場に駆けつけ、記事を書いた時代の目撃者とも言える人物である。もう一人は、「ニューヨーク・タイムズ」紙の専属記者であったウィリアム・ローレンス(William H. Lawrence)である<sup>(2)</sup>。GHQ認可特派員の中では、この当時29歳であった記者のルポが最も早く掲載された。その文体は、世界に先駆けて被爆地ルポルターージュを発表したウィルフレッド・バーチェット(Wilfred Burchett)の記事と比べると抑制された語りのトーンでありながらも、被爆地の惨状に驚愕している書き手の様子が見て取れるものであった<sup>(3)</sup>。

米国特派員の中でもとりわけ人的被害の方へ焦点を当てたこの

2人の「被爆者の苦しみ」へと向けられたまなざしとは、具体的に如何なるものであったのだろうか。この点を考察するために、まず他の認可記者達の記事には見られなかったある「場面」をビッグアート及びH・ローレンスが採用したという点に注目したい。それは、取材中にGHQ認可特派員達が偶然遭遇したと思われる一人の「日本人被爆者である老人との遭遇」というエピソードである。この場面がビッグアート、H・ローレンス以外の特派員達の記事からは採用の確認が取れなかったのは、おそらくは取るに足らない出来事として原稿から削除されたためであろう。しかし、この「老人との遭遇」という場面の採用は、ビッグアート、H・ローレンスの被爆／被爆者に向けられたまなざし、ひいてはこれらの記事がアメリカ社会に送り出された、1945年9月当時における社会的バックグラウンドをも検証する上で重要な要素だと筆者は考えている。以下は1945年9月5日付けで「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」紙、及び「ニューヨーク・タイムズ」紙に掲載されたビッグアート（引用1点目）、ローレンス（引用2点目）の記事からの引用である。

「私たちは後に、（通訳を担当した日本国籍の）海軍副官に対し、原爆の際の目撃情報を得るべく通行人に声をかけてくれるよう頼んだ。この副官は、以前サクラメントに住んでいたことのある人物である。

『日本人は、あなた方とは話したがらないかもしれません。』と彼は言った。しかしついに、彼はある一人の老人を止めた。老人は私たちに對し明らかな友愛の感情を示し、金歯を見せ

ながら笑いかけた。

『私はクリスマスチャンです』とその老人は、十字架の形を身振りで示しながら言った。彼は自分の耳を指差し、耳が聞こえないことを示した。しばらく副官は、この老人に何とかして言っていることが聞こえるように努力していたが、無駄骨だった。彼が言うところによると、この老人はその他多くの人びとのように、原爆の爆風で鼓膜が敗れ、聴覚を失ったようであるとのことである。』<sup>(14)</sup>

「私が共に歩いていたのは、22歳のアメリカ生まれの日本人の海軍副官であった。彼は私たちの為に、道行く人々に、原爆投下の日に広島にいたかどうかを聞こうと声をかけていた。一人の耳の聞こえない老人が、私たちがアメリカ人だと分かる時、近寄ってきて私たち一人一人と握手し、クロスの形を身振りで作り、自分はクリスマスチャンであることを示した。通訳によると、彼は家族を爆撃により失ったとのことであった。』<sup>(15)</sup>

これら2つの記事において、若干の差異は認められるものの、「老人と書き手との遭遇」という場面における要点としては、以下の3点に要約される。まず1点目に、「老人」はクリスマスチャンであること。2点目に、「老人」は原爆を受けたことにより、聴覚の喪失、家族の喪失という多大なる負の影響を受けているということ。そして3点目に、それであるにもかかわらず、アメリカ人であるプレスメンバーに対して好意的であるということである。こ

の中で、特に3点目に注目したい。「損失を被っているにも関わらずプレスメンバーに対して好意的」である老人に書き手はまなざしを向けているわけであるが、この場面を書き手が取って抽出したという事実には、この場面を書き手が敢えて抽出したという点がある。この場面を老人に向けて書き手のある交錯した感情が存在しているのだという点を強調したい。この場面の中で、「老人」はある重要な役割を持っているが、それは「老人」は書き手を完全に困惑させてしまっているというものである。つまりこの二つの記事においては、静謐を貫く客観的な文体が採用されているが、読み手は書き手と「老人」との遭遇場面から、書き手が持つアメリカ的イデオロギーによって形成された対日観が揺るがされてしまい、いかに当惑しているかを読み取ることができる。引用箇所から分かるように、「老人」はアメリカ人である書き手に対し好意的で、友愛の態度を身振りで示した、とあるが、この状況下において、書き手が果たして如何に反応したのか、という点については述べられていない。なぜならば、被爆者である「老人」が原爆を投下したアメリカ人に対し友愛を示すこと、それはアメリカ人である書き手にとって予想外の事態であり、アイロニーを含んだ状況であるためである。「老人」に友愛の感情を示されたことで、クリスチャンであるいわば「同胞」とも言えるべき人々を殺傷してしまったことに罪の意識を感じるべきなのか、原爆が原因で聴覚を失った「老人」にシンパシーを覚えるべきなのか、あるいは全く逆に、それでも原爆はやむを得なかったという結論に達するべきなのか。このような書き手の様々な感情が錯綜しているのが、この場面から読み取ることができるのではないだろうか。言い換えるならば、「老人」がアメ

リカ人に対し友好的になればなるほど、書き手にとって状況は複雑化すると言える。

ビガートやH・ローレンスなどの米国プレスメンバーが被爆地入りをした1945年9月という時代は、トルーマン率いるアメリカ政府によって、日本人のイメージキャンペーンが大々的に推進されていた時期と重なる。歴史学者のジョン・ダウワーによると、太平洋戦争中も日本人に対する人種的偏見が米国内では蔓延していたとされるが<sup>(6)</sup>、日本軍の蛮行に焦点を当てたこの政府主導のキャンペーンは、いわばこの既存のイメージに便乗したものであった。この動きは、広島市への原爆投下直後の1945年8月7日、トルーマンの公式発表を全米の新聞に掲載するにあたり、大戦終結後に報道業界が人道上の問題について騒ぎ立てることへ政府関係者が懸念を持ち始めたことに端を発する。そしてその内容を支えているのは、日本軍によって行われた連合軍捕虜・侵略国の国民に対する一連の「残虐行為」の告発である。リフトンによると、1945年9月5日には、時の国務長官ジェームズ・バーンズが日本軍によって行われたとされる捕虜に対する残虐行為をまとめた報告書を発表している。その中には、「捉えられた米国人捕虜が斬首されたり、生き埋めにされたり、食べられたりさえした」というおぞましい事例の数々が含まれている<sup>(7)</sup>。このキャンペーンが原爆投下と深い関連性があり、原爆投下を行なったことで、人道的観点からの非難が国内外からアメリカ人に向くのを防ぐという目的があったことは、今となっては明らかである。また「タイム」誌も、当時アメリカ国民はこの2つの出来事の関連性を敏感に感じ取っていたと述べている。しかし、このキャンペ

ーンによって、多くのアメリカ国民が「ヒロシマ・ナガサキ」という事件について語る際に想起する「日本人イメージ」の形成に寄与したこともまた事実であろう。つまり、「ヒロシマ・ナガサキ」と言う際に「日本軍の蛮行」という文字列が喚起されるのは、このキャンペーンに依るところが大きいのである。例えば、「シカゴ・デイリー・ニュース」の記者であり報道人として初めて被爆後の長崎を取材したとされるジョージ・ウエラーは、そのナガサキ・ルポの中で被爆地の凄惨な状況を生々しく描写しつつも、日本軍の蛮行をルポの至るところで挿入している<sup>10)</sup>。これはアメリカ国民の日本人イメージ・原爆イメージの形成に、政府主導のキャンペーンがいかに影を落としているかを如実に物語る一つの例である。ビガート、H・ローレンスも、ヒロシマ・ルポの中で、被爆地でいかに日本人から憎悪の感情を向けられるか不安であったと述べている。この一節からも、「残虐な日本人」というイメージを報道陣達が抱いており、原爆投下に関し如何に日本人による報復的な仕打ちを恐れていたか、という点を読み取ることができ、裏を返せば、この「不安」の感情は、彼ら報道陣が政府のキャンペーンに絡め取られていたことを示していると言える。

当時のアメリカ社会を取り巻いていた日本人イメージの残影であり、そのイメージの枠組みから脱しきれずにいる平均的なアメリカ国民の声であるとも言えるだろう。

しかしながら、これら特派員達の現地ルポが紙面に登場してからおよそ1年後の1946年8月31日、ジョン・ハーシーが「ニューヨーク」誌に発表した被爆地ルポルタージュ『ヒロシマ』によって、被爆者の苦しみへのまなざしは「二変する」。先述のビガートやH・ローレンスなどの特派員たちによる先行テキストと比較した際に、『ヒロシマ』の特徴点として挙げられるのが、被爆者を見るナラティブの大々的な変貌である。最も顕著な特徴点として挙げられるのが、視点人物の変更であると言えるだろう。ハーシーのテキストには、ビガートやH・ローレンスらが採用した「私」あるいは「私達」という一人称は登場せず、一貫して「Miss Sasaki」、Father Keinsorge<sup>11)</sup>、Reverend Tanimoto<sup>12)</sup>などの被爆者自身が主語に用いられる三人称が採用されている。つまり被爆者／被爆地の姿を自分の眼で「見」て、被爆者の感じる痛みを外側から傍観する者として記述したビガートやH・ローレンスとは異なり、ハーシーは自らを6人の主要登場人物の目線と同一化し、彼らの立場から被爆地の物語を紡ぎ出している。

『ヒロシマ』の特徴点をもう一点、挙げるならば、それは書き手による「被爆者の苦しみ」へのコミットの度合いである。先述のように、ビガートやH・ローレンスのルポにおいては、日本人被爆者との一定の距離が存在している。「害虫、ゴキブリ、蛇、鼠」などと同一視され人間とは思えない野蛮さを持つ民族であるという日本人イメージが定着していた中、極めて人間的で、友愛

の感情を示す一日本人被爆者と接触した彼ら特派員達の記述から読み取ることができるのは、安堵感や親交という肯定的な反応というよりは、日本人被爆者達にどうコミットしてよいか分からない、という錯綜した感情である。この感情は大戦中から形作られてきたアメリカの対日観の影響を書き手が少なからず受けていたことを反映している。

一方、ハーシーは被爆者達に対し、ビガートやH・ローレンスとは異なつたアプローチを採用している。彼は被爆者達の人間性に光をあてることで、それを核兵器という恐ろしい武器が持つ力への対抗軸として押し出している。このアプローチの根底には、日本人の血の通つた人間であり、米国人同様に痛みを感じる存在という書き手自身の認識が確かに存在していると言えるだろう。

ビガートやローレンスなどによる被爆地テクストが全米に流布してからハーシーの『ヒロシマ』発表までの期間は1年にも満たない。この間、何故上記のような被爆地／被爆者表象に変化が生じたのであろうか。ここで提示されるべき問題として、以下の点が挙げられる。すなわち、米国人が「被爆者の痛み」に向ける意識が、1945年中盤から1946年8月までの間にかけ、国民レベルで変遷を遂げつたものではなからうか、そしてハーシーの『ヒロシマ』という作品は、そうした国民の意識の変遷に沿う形で発表されたのではないか、という点である。

パトリック・シャープ(Patrick B. Sharp)が、『ヒロシマ』は6人の被爆者個人の目線で物語を展開していくことによつて、人的被害の報告を抑制しようとした米国のオフィシャル・ナラティブに對抗し、大戦中より蔓延していた「イエロー・ペリル」という

米国人のステレオタイプの日本人観をも覆す原動力となつた、と述べている<sup>(9)</sup>。しかし『ヒロシマ』発表後の米国社会の反応を見る限り、『ヒロシマ』は突然発生的に出現し、また書き手が個人的にオフィシャル・ナラティブに挑戦したと考えるよりは、この作品にはいくつかの雛型／プレテクストが存在した結果、これらプレテクストが米国社会で何らかの啓蒙的役割を果たし、米国人が「ヒロシマ・ナガサキ」にまなざしを向ける際の新たな問題領域が開かれつつある状況にあつたと考えるのが妥当ではないだろうか。事実、広島・長崎への原爆投下直後より『ヒロシマ』発表までの期間、非常に多くのナラティブが世に送り出されており、その中には、相互作用的役割を果たしたり、受け手に影響を及ぼしたりしたテクストも存在する。

次章以降では1945年9月～1946年8月31日の『ヒロシマ』発表までの間に全米に向けて発信された手記・声明にあたり、具体的に被爆地報道、証言をめぐる如何なる動きが米国内で起き、それらが原爆に関する国民感情と如何なる関係性を持つていたのか、という点を考察する。

### 3 原爆投下を巡る3つのナラティブ

リフトン及びミッチェルによると、1945年8月から始まつたヒロシマ・ナガサキについての論考には、大きく分けて4つのステレオタイプがあるという<sup>(10)</sup>。第一のタイプは、原爆を「人類に混乱を招くもの」として位置づけるもので、人類が生存していくための土台が原爆の誕生によつて揺るがされ始めたことへの懸念が現れて



いる。第二のタイプは、人類の歴史が原爆の誕生によって終止符を打たれることになるのではないかというもので、終末論的系譜に結びつく。第三のタイプは、原爆投下と同時に人間の精神の「分裂」が始まったと主張するもので、原爆を如何に利用するか、その選択に人類の運命は委ねられているとする。そして第四のタイプは、原爆投下を人道的観点から疑問視する一方で、結局は「多くのアメリカ人の命を救う為になされた寛容な行為であった」という点に帰結するというものである。これら4つの論点に基づいて発表された記事、声明等は原爆投下直後より全米に氾濫し、国民にも広く認知されることとなった。しかしながら、これら4つのカテゴリーに分類される多くのナラティブにおいて、「ヒロシマ・ナガサキの被爆者」に焦点を据えたものは存在せず、いわば、被爆者は不在であると言つて良い。この点に加え、これらは原爆投下について語る上での常套文句となつてしまつたという点において、米国民の広島・長崎に対する問題意識が固定化されてしまうという危険性があると言える。本章では、この問題を打破し、米国民に「ヒロシマ・ナガサキ」を異なるアングルから捉えるきっかけを与えた可能性を持つテキストとして、フィリップ・モリソン、ルイス・マンフォード、そしてキリスト教会連合協議会（以下、FCCと記載する）による3つの論考・声明を取り上げる。

### 3-1 “Beyond Imagination”

モリソンの広島証言に基づく論考が「ニュー・リパブリック」紙に掲載されたのは、1946年2月11日のことである。物理学者であつたモリソンはロバート・オッペンハイマーと共にマン

ハッタン計画に加担、1945年7月14日にはニューメキシコ州トリニティで行われた人類史上初の核実験にも立ち会つたことに加え、原爆投下直前にはテニアン島での最終作業にも関与したという原爆投下計画の中心にいた人物であつた<sup>(31)</sup>。レオ・シラードやアルバート・アインシュタイン同様、第二次大戦中にドイツがアメリカに先立つて原爆を使用することに懸念を示し、原爆製造に協力したモリソンではあつたが、その行動とは裏腹に、トリニティ核実験を皮切りに原爆の驚異的な殺傷力に懸念を示し、原爆の使用に断固とした弾劾の姿勢を採るに至つた、という点は興味深い。

具体的に、それまでの広島・長崎をめぐる論考と比較検討した場合のモリソンのテキストの際立つた特徴点とは如何なるものであつたのだろうか。「ニュー・リパブリック」紙に掲載された実際のテキストを参照してみると、技術方面の専門家として、原爆の構造に関し物理学の観点からの解説を付与している点においては、先行する科学者達が発したナラティブとの大きな差異はない。しかし注意して見てみると、モリソンのテキストには「抵抗の可能性」「無差別性」「瞬間の脅威」といった原爆の性格に関する繰り返し返されるモチーフがあることが分かる。それらは例えば、以下のような形で表されている。

この手の爆撃を表すのに、適切な言葉がある。それは「集中攻撃」という表現だ。仮に誰かを、あるいはどこかの都市に攻撃を仕掛ける際、敵は自らを守る行為を採る。誰かを攻撃したとしても、その人物は逃亡するか反撃を仕掛けてくる

ことだろう。どこかの都市を攻撃したとすれば、その街は対空射撃を行い、消防団員を招集し、負傷者の救護にあたるだろう。しかし、圧倒的威力をもってして一度に爆撃した場合、相手は自らを防衛することはできない。(中略)原子爆弾は、「集中攻撃」を目的とする武器である。その破壊力はとてつもなく速く、かつ完全であるために、防衛は絶望的に不可能である。(The New Republic, 178)

このようにモリソンによると、「圧倒的威力」を前にして個々の人間は無力状態であり、生存の為の如何なる行為も意味をなさない。こうした状況の中で生死を決定付けるのはもはや運命以外の何物でもないという不気味な現実が投げかけられている。

さらに、被爆後の長崎の状況がアメリカと同一平面上として捉えられている点に注目したい。すなわち、長崎でモリソンが目撃した状況が、アメリカのどこにでもある風景、情景の枠組みを参照して描かれている。例えば、「ローマ・カトリック教会」こと浦上天主堂が「全壊していた」という情景説明の後で、以下の描写が続いている。

その様子は、まるでアメリカの都市が日本の都市と同じ位の打撃を受けたかのようなものである。もつとも、上空からだて破壊の状況は実際よりも軽く見えるのではあるが。(中略)原爆が鉄筋構造の建造物に与えた影響は、三菱製鋼長崎工場の残骸によって知ることができる。日本の一般家屋は脆く作られているが、工場の耐久性は我々のものと同じなのだ。(中

略)私は患者である一人の男性を見た時のことを覚えている。彼は原爆が投下された時、鉄道会社の制服を着ていた。この日本の制服は濃い色のサージで作られており、左胸には等級を表す記章が縫いつけられていた。その記章は、十字架の様な形をしていたのだろう。この十字架の形をした記章の下を除いて、彼の体は全身が重度の火傷で爛れ、黒く炭化していた。

こうした情景説明は、米国人読者に被爆地／被爆者に対し想像力を馳せるよう仕向けるといった単なる仕掛けではない。「ヒロシマ／ナガサキ」をアメリカのどこにでも見られるような状況に重ね合わせることは、「ヒロシマ／ナガサキ」が置き換え可能な出来事であることを意味している。また原爆の無差別性の強調は、読者を「そこにいたかもしれない自分」として認識させるといふ不穏な余韻を含んでおり、この余韻こそが、テクスト全体を貫く一つの重要なモチーフである。モリソンのこうした試みは、第二次大戦中のアメリカが民間人を巻き込む爆撃をほとんど受けなかつたことと関係しているように思われる。広島原爆直後より開始された被爆地の上空ルポや航空映像・写真が氾濫する中で、アメリカは自らをあくまで爆弾を投下する側へ上空に属する存在であるとの認識の上に立っていた。この点を考慮すれば、モリソンのナラティブは、爆撃される側のリアリズムを前景化したという点で、当時の米国社会で象徴的な意味を持つたと言いうことができるのではないだろうか。『ヒロシマ』は、6人の生存者達が原爆炸裂の瞬間にどこで何をしていたのか、という描写から始まる。こ

の描写が米国で意味を持つためには、エノラゲイから街を見下ろした抽象的で漠然としたイメージが、地上から見た具体的な視点へと移動される必要があった。この視点の逆転は、爆撃される側の現実が伴っていなければならなかったという意味で、モリソンのテクストはアメリカ国内における『ヒロシマ』受容の素地を形成したと考えられる。「8時15分」「11時2分」という具体的な数値は、「広島・長崎」を「自分達の身に起こったかもしれない物語」という視線をもって初めて、人々の「生」を決定づけた不気味な時刻としての意味を持ち始めるのである。

### 3-2 無自覚な狂気——Lewis Mumford——

文明評論家であり都市論にも深い造詣のあったルイス・マンフォードは大作『都市の文化』の序論において、文明の形成段階で最も尊重されるべきものは人間の「生」であり、それはいかなるものにも先行して尊ばれなければならないとする主張を提示し、文明が生み出した野蛮主義への対抗軸として一貫した「生」の礼賛を説いた。全世界にファシズムの波が到来しつつあった1938年のことである。マンフォードは以下のように述べている。

今日われわれの世界は危機に面しており、その危機たるや、もし今日それが予見されるほど重大な結果を来すならば、次の世紀にも十分には解決されないだろう。文明における破壊的な力が優勢になるならば、新しい都市文化はいたるところで傷つき倒れてしまうだろう。もしわれわれの都市がだいになしにされ、そして廃墟となつてしまえば、それは死者のた

めの墓場、人間に比べてまだしも破壊的ではない獣に引き渡される冷たい獣穴になってしまおう。しかし、その運命を避けることもできるのである。おそらくこうした必死の挑戦に取り組むことによつて、それに必要な独創的な力が効果的に一つに結び合わされるであろう。(中略)いかなるものも生を除いては、つまり出生・成長そして毎日の新陳代謝への能力をおいて耐えていくことができない。生がわれわれの文明のなかで、野蛮主義の向うみずの突撃にうちかつて、もう一度反撃してくるならば、都市文明は手段と目標の両者となることができよう。(『都市の文化』11-12頁)

この1938年の論考を参照する限り、文明の野蛮的な側面に警鐘をならしつても、その行先に対しマンフォードは一筋の希望を託しているように思われる。この主張の土台となっているのは、いかなる時代にあつても冷静な眼差しを時代を生き抜く人間の'sanity'に対する信念であつた。

しかし、マンフォードが危惧していた「文明の破壊的な力」は、この著書の発表から7年後、広島・長崎への原爆投下をもって現実のものとなる。野蛮主義は原子爆弾の使用と見事に符号し、彼が繰り返し説いた人間の「生」は、行き過ぎた文明の帰結としての「殺戮」の前に脆くも屈してしまった。こうした事態へのレスポンスとして、マンフォードが「サタデー・リビュー・オブ・リテラチャー」(The Saturday Review of Literature)に"Gentleman: You Are Mad!"と題した原子爆弾に関する論考を発表したのは、1946年3月2日のことである。表題の"Gentleman"とは米国民を指

し、ポストヒロシマ・ナガサキの米社会が如何に狂気じみた状況に置かれているかという点を繰り返し主張すると同時に、科学者・政府関係者達が自らの「健全さ」を標榜しながら米国を狂気の道に引きずり込んでいくという現状に警鐘を鳴らしている。論考内にて頻繁に登場する'madmen'は、ポストヒロシマ・ナガサキに生きる米国民の「狂気」を表象する存在であると思われる。また彼らは尾に'comet'なる物体を保有しており、それを「まるで子供が遊ぶ爆竹のように」扱うことで、自らの'sanity'を証明しようとしているとマンフォードは述べる。さらに、'madmen'が設置した「機械」の存在により街は破壊され、その破壊性にも関わらず彼らは「機械」を作り出し続けている、と述べられている。以上のような要素を見る限りでも、本テクストは論考というよりは寓話に近い特徴を備えているということが分かる。また、マンフォードの放つメッセージは一見すると明白であり、「大量破壊兵器への弾効」という点においては1945年10月頃に頂点を迎えた米国の紙面におけるカウンタナーティブと大きな隔たりはないように思われる。しかし、この一見明白な主張に支えられたテクストは、ある特質によってそれまでの広島・長崎関連記事／論考とは明らかに一線を画すものである。この特質としては以下の2点が挙げられると筆者は考える。まず第一点目に、マンフォードの論考は、広島・長崎への原爆投下に見られるような「社会的暴力」に対し独自の見方をしているという点だ。つまり、個々の人間を破壊の道へ導く原因を人間個人の異常心理ではなく、国家の異常性に求めている。実は、「社会的暴力」に対するマンフォードのこの見方は、1946年当時の社会科学者達が共通的に抱

いていた見方とは一線を画すものであった。当時、社会科学の専門家の常識としては、「核問題は人間に内在する暴力性に起因するとされてきた」が、こうした分析は「問題を単純化しかつ、観念的に捉えることによつて、原因は『構造的』なものではなく、『人間である以上当然の帰結だ』という結論を導いた」(Jacobs, 128)。つまり社会的暴力の起こる原因を国家の異常性ではなく、個人の心理に求めたのである。これに対しマンフォードは、「Gentleman: You Are Mad!」の冒頭で、以下のように述べている。

アメリカに在る私達は、狂人の中で生きてゐる。狂人達は秩序と安全という名目で、私達の日常を支配する。狂人の中でも主要な者達は、長官、将官、上院議員、科学者、行政官、國務長官、あるいは大統領の肩書きをさえ主張する。そして、彼らの狂気もたらず致命的な事態とは以下のようなことだ。すなわち、人類にゆくゆくは破壊をもたらすであろう行為を遂行するということであり、それは自分達が正常で責任のある人々であり、理にかなつた目的のために行動しているという真面目な信念の下で行われるのだ。<sup>(2)</sup>

つまり社会的暴力は人間同士の対立に起因するのではなく、大統領、國務長官、軍指導者などに支配された「国家の異常性」にあることを明示した上で、個人がその構造に絡め取られ破壊の道へと突き進んでいくことへ警鐘を鳴らしている。ここで、'President'や'Secretary of State'という語に含められた非難の姿勢は文字通りトルーマンやスティムソンに向けられているというよりは、国家

の異常性に向けられた非難であり、正常さを装いながら人々を狂気へ誘導することへの弾効である。このように、広島・長崎への原爆投下に代表される「社会的暴力」の原因を、個人を権力でもって支配する国家の異常性に求め、単に「原爆投下は人間のしたことだからしかたがない」という単純な結論への到達を回避しているという点が本論考の大きな特徴点である。

マンフォード論考と『ヒロシマ』との接続関係を見る上でとりわけ注目し値するのが、特質の第二点目である。それは、行き過ぎた文明への懸念と不信を示しつつも尚、人間の'sanity'への固執が見られるという点だ。つまり、"Gentleman: You Are Mad!"<sup>174</sup>、

原子爆弾の放棄を声高に訴えたと同時に、米国人の失われた'sanity'の回復を目指すことを説いた寓話としての意味を持っているということである。ここで、"Gentleman, You Are Mad!"<sup>175</sup>が発表された当時の米国の歴史的背景に着目したい。1945年下旬、1946年上旬は、広島原爆報道直後から始まった「行き過ぎた文明への不安」が依然として渦巻いていたが、その国民の不安と連動して、次節で言及するように、プロテスタント系聖職者を主導とするモラルキャンペーンが大々的に行われていた時期でもあった。この動きは1946年3月には非常に活発になり、結果として、"Christian Committee"が22名の有識者の連名により、"Atomic Warfare And The Christian Faith"と題された声明文を世に送り出している。これらの動きに関しては次節において言及するが、ここで指摘したいのは、1945年後期〜1946年初頭という時代において、マンフォードが1938年に『都市の文化』の中で説いた人間の生の尊重が声高に叫ばれる土壌が芽生えつつあったと

いうことである。これらの動きは、個々の人間の「生」を飲み込んでしまう国家の'insanity'に対する懸念から出たという意味で必然的であったと言える。

それでは、マンフォードが'sanity'に対して固執したことは、ハーシーの『ヒロシマ』との接続関係を見る上で如何なる意味を持つているのだろうか。この点を考えるには、マンフォードが人間の如何なる状態を「正常」で、如何なる状態を「異常」としたか、という点に着目しなければならないだろう。マンフォードは以下のように述べている。

なぜ私達は声をあげることもしない、狂人達にゲームを続けさせているのだろうか。(中略)それには理由がある。すなわち、私達も狂人だからなのだ。私達は、指導者たちの狂気をあたかも伝統的な知恵や常識だと思込んで見ている。

私達は彼らを落ち着いて眺めている。それはまるで、麻薬中毒の警察官が銀行強盗や幼児殺害の様子を、あるいは線路上に時限爆弾が設置されている現場を流し目で見ているかのようである。行動における誤りは、私達の狂気の指標でもある。私達は狂人達を見ても通り過ぎてしまうのだ。<sup>176</sup>

ここでは、凶悪犯罪が眼前で行われているにも関わらず、それを平気で見逃してしまう警察官が例に挙げられているが、マンフォードによれば、「私達」は正にこれと酷似した状況に置かれている。つまり「私達」は異常事態が目の前で展開していても気付かずにおり、「指導者の異常性をまるで昔から伝わる知恵や常識と

いったものだと思込んで見て」いる。これは個人のモラルが権力によって掌握されてしまっている状態であると同時に、自らの道徳的優越を信じて疑わないが故に、周囲の異常性に気付かずにいる状態であると言えよう。そしてこの状況こそが、マンフォードが最も危険視したポストヒロシマ・ナガサキにおける米国民の置かれたものであった。つまり、マンフォードテクストは、異常な権力に支配され、無自覚の内に狂気へと陥っていく米国民に、個性の回復を目指すことを説いたものであったのだ。『ヒロシマ』は、6人の登場人物達が原爆投下後の無秩序となつた広島市の街から、独自の規範に基づく倫理と個性を見出して行く物語である。原子爆弾がもたらした暴力的で、混沌とした状態において被爆者達に求められるのは、自らのレンズを通し、周囲を見つめることである。そして彼らによる倫理と個性の奪還は、それが権力に迎合するものではなく独自の規範に基づくものであるからこそ、物語の中において、原爆という暴力的不可抗力への強力な対抗軸としての力を持ちうるのだ。彼らのこうした姿は、当時の米国民の置かれた状況と共鳴するものがあつたと言えるのではないだろうか。

### 3-3 「正しい戦争」と民間人の死という小さな物語

#### — FCC 声明 —

1945く46年という時代の枠組みにおいて、広島・長崎への原爆投下を巡る米国内の状況を考える上で見逃すことができないのが、キリスト教関係者の反応である。広島・長崎への原爆投下に対する弾劾の声はこの事件の直後、厳密に言えば1945年

8月7日より既に起こっていたが、これら主張の急先鋒となつたのがキリスト教関連団体であつた。例えば本章で取り上げる米国民キリスト教連合協議会(FCC)の議長 Bromley Oxnam 及び John Foster Dullis は長崎への原爆投下の報道が行われる直前の8月9日(アメリカ時間)、日本に対する再度の原爆投下を行うべきではないとの共同声明を発表している。彼らは「もし、自らをキリスト国家だと公言する我々が原子力の使用に対し見境のない態度を採るならば、この世界の人間誰もがその判断を受け入れてしまうこととなるだろう」と述べ、さらには黙示録的破壊への強い懸念を表した。また広島市への原爆投下から2週間後、34名のプロテスタント系の関係者達が署名を集め、原爆投下に抗議する文書をトルーマンに提出した<sup>(24)</sup>。こうした動きは当時の世論を大々的に動かす原動力となることはなかつたものの、言論を率先した者達が民衆にモラルを説く教会指導者であつたことは、広島・長崎への原爆投下に対する米国民の意識形成を考える上で意義深い。

1946年3月6日、FCCによる最終答申「核戦争とキリスト教信仰」の発表は、それまでのキリスト教会関係者による原爆投下抗議運動の一つの帰結点である。本声明文は「ニューヨークタイムズ」紙の一面に大きく掲載された<sup>(25)</sup>。本声明文発表が一つの「事件」として現在でも度々言及されるのは、イェール大学で歴史神学を講じるロバート・カルホーン教授や神学者リチャード・ニーバー、またその兄であるラインホルド・ニーバーなど当時の米国民キリスト教社会を主導する22名の錚々たる人物の署名が声明に付されていたためである。1908年発足のFCCは、1950年に組織された全米キリスト教会協議会(NCC)の前

進であり、リベラル派の流れを組む団体である。宗教社会学者の堀内一史によると、リベラル派の基本理念、具体的には人間の「罪」の定義付けは以下のような形であると指摘されている。

(リベラル派は) 罪を「人類の本質的欠陥」とは見ない。

罪はあくまでも人間の不完全さであり、人間が生きていく上で生じるさまざまな環境への不適応であり、教育や祈り、内省や善行によつて克服できるものと考えた。したがつて人間は神の導きにより、道徳的改革、社会主義、世界平和の実現に着手できる、つまり、地上における神の国の先駆けとなることができると考えた。<sup>(26)</sup>

FCC声明はこの立脚点に立つたものであると言つて良い。つまり本声明は広島・長崎への原爆投下をアメリカが犯した罪とみなし、国民に懺悔することを促したのである。1946年3月当時のアメリカの社会背景を考慮すれば、声明文の発表は大々的な挑戦であつたと言える。それというのもこの時期は原爆投下肯定派に対するカウンターナラティブが主流を成していたとは決して言えない状況にあり、1945年11月時点での統計によると、70%を超えるアメリカ国民が日本への原爆投下を支持していたのである。<sup>(27)</sup>さらには、「原爆投下を契機に世界の秩序が回復され、原爆という神のパワーによつて人々の間に信仰回復が起こるだろう」といったものや、「アメリカが武器としての原爆を管理する立場となつた背後には神の摂理が存在する」といったようにアメリカの原爆保持、またその使用を神の意思と位置づけることで肯

定的に見るといふ意見までもが出現していた。<sup>(28)</sup>こうした状況下、原爆投下への懺悔を説いたFCC声明に関し、リフトン、ミツチエルは「影響力のある報告書」であり、「それまで沈黙を貫いていた他の教会指導者達の発言を後押しした」と評価している。<sup>(29)</sup>

リフトン、ミツチエルの例に見られるように、これまでの先行研究において、FCC声明は広島・長崎への原爆投下肯定派に対する強力なカウンターナラティブとして位置づけられてきた。とりわけ、本声明文における以下の箇所はFCCの広島・長崎に対する姿勢の特徴が最も如実に表れていると言える。

私達はまず、悔恨の情を表明したい。アメリカのキリスト者として、すでに行われた取り返しのつかない原子爆弾の使用に対し、私達はその罪を重く受け止めている。戦争の倫理に関する判断がいかなるものであれ、広島・長崎への無警告の爆撃は人道的に弁護の余地のない行為だ。彼らは、身の毛もよだつようなやり方で、第二次大戦中においておなじみとなつてしまったところの非戦闘員の無差別大量殺戮を繰り返した。二つの爆弾は、警告なしに、十万人もの民間人を殺傷できるという状態の下で投下された。<sup>(30)</sup>

ここで述べられているように、アメリカが原子爆弾投下に際し「非戦闘員の無差別大量殺戮を行ない、爆撃地を民間人の居住地とした」という点こそが、FCC声明が最も顕著に弾劾姿勢を示す問題点であり、最大の論点である。この論点は本声明において相当の頻度で登場する。ここで喚起される問題の一つとしては、そも

そも F C C は何故、広島・長崎への原爆投下を語る際、「非戦闘員の殺戮」という点に固執したのであるうか、という点である。この点に関し、当時の米国人が抱いていた対日戦線を巡る認識を考慮に入れると、単に「キリスト教的モラルからの逸脱」という点に留まらない理由が見えてくる。この問題を考える前に、本声明文における以下の部分にも着目したい。

先の八月に行われた新兵器の使用がたとえ戦争の集結を早めたとしても、人道的代償は相当のものだ。このような状況の下で、史上初の原爆使用を行なった国家として、私たちは神の法にそむき、また日本の国民に対して大きな罪を犯した<sup>(51)</sup>。

ここで声明は原爆投下の道義的逸脱は相当のものであり、それは「たとえ原爆投下が戦争終結を早めたとしても」変わらないと述べている。「原爆投下は戦争終結を早めた」ために正しかったとする見解はいわゆる「正戦論」の考えに基づいているが、この考えに沿うならば、対日戦、そして続く原爆投下も正しい行いだっただということになる。政治社会学者の藤原帰一は、アメリカ人とヨーロッパや日本を含むその他の地域の国民との戦争認識の決定的な違いに、「自国が戦場にされたかどうか、すなわち自国の非戦闘員が攻撃の対象となったかどうかという点を挙げている。この点に加え、米国は「戦場にもされず戦争に負けもしなかった」という事実のために、「戦争の目的、手段、主体に対する疑いが限られてしまい、正しい戦争という観念もくつがえされることがなかった」という<sup>(52)</sup>。とりわけ、対日戦線は「正しい戦争」であ

ったという認識が強固であった戦争であり、日本人は米国史上最も米国民に忌み嫌われた敵国民であった (Dover)。このように、対日戦線は正義のための戦争 (justice)、良い戦争 (good war) という特別の意味合いを持っていた。正義のための戦争という名の下には、たとえ非戦闘員であっても殺戮の対象とすることに疑いの余地はなかった。しかし、こうした風潮は爆撃対象となった人々を集団としての「敵国民」にすぎないという考えを助長し、また個々の人間への想像力の欠如を生み出す危険性を伴っていた。

ここで、最初の問題点に戻りたい。F C C が非戦闘員の殺戮に強い弾劾姿勢を示したことの背景には、如何なる理由／背景があったのだろうか。先述のように、1946年当時の米社会では、「正戦論」の考えに基づき、対日戦、及び原爆投下を正当な行為として捉える見解が主流であった。しかし、「正しい戦争」という美しく、ナシヨナリズムに彩られた大きな物語への傾倒がもたらしたのは、個々の人間の生死を巡る「小さな物語」の不可視化であったということも、事実である。F C C 声明は、個々の人間によって構成されるこの「小さな物語」への無関心こそが人間を破滅の道へ導く道義的不義として危険視したテキストであったのだ。声明二つ目の引用において、F C C は原爆投下を「日本国民に対して犯した罪」であると同時に「神の法に対して犯した罪」として弾劾してだが、このことは原爆使用を「神の摂理」として肯定する見方への強力な対抗軸であり、同時に、「神の摂理」という美辞麗句の下に存在を見えなくされた無数の個人の生死を巡る物語回復を目指したのである。



#### 4 おわりに：3つのプレテクトと『ヒロシマ』発表というセンセーション

ガー・アルペロヴィッツ (Gar Alperovitz) によると、原爆投下に対する弾効を示す主張は、すでに原爆投下直後より沸き起こっていた。その動きは、small<sup>33)</sup>ではあったものの、steadyな流れを形成し、決して少なくない数の米国人の目に触れることになった<sup>33)</sup>。とは言え、原爆投下に対する初期のクリティカルなテクトは先述の通り、被爆者不在のナラティブとして世に送り出されていたと言つて良い。とりわけ、原爆という人知を超えた力を手に入れたことに対する警告を示したのもや、行き過ぎた文明の行く末を懸念する主張は度々登場していたし、また人道的観点からの弾効も頻繁に見られる傾向にあった。これらテクト群のいづれにも欠落しているものがあるとすれば、それは被爆者の痛みや、被爆者の個人的な物語へ想像力を馳せるといふプロセスであろう。この点において、モリソン、マンフォード、そしてFCCによるテクトはそれまでの被爆地論考の欠落を埋める独自の視点を持っていたと言つて良い。

本論ではこれまでに、3つの論考や声明が如何なる点で1946年8月31日の『ヒロシマ』発表に伴うセンセーションナルへの布石となっているかという点について分析してきた。ここで強調したいのは、これら論考や声明の流布は広島・長崎への米国民の見方の方向性を規定した単純な現象であったというより、1945〜46年当時米国の人々が漠然と思っていた形にならぬ被爆者への眼差しをこれらのテクト群が言語化した現象であった

という点である。すなわち、これらの論考や手記と米国民の被爆者に対する眼差しとの関係性とは、前者から後者へと影響のベクトルが向いているというより、両者が相互作用的に影響関係を持ったという可能性を考慮する方が適切であると筆者は考えている。『ヒロシマ』というテクトの出現は、1945年8月〜1946年8月にかけて世に送り出されてきた数々のプレテクトの1つの帰結点であり、原子爆弾の投下、日本の降伏、第二次大戦の終結、対日観の揺らぎ、道義的問題の浮上などという混乱を極めた時代に渦巻いていた米国の風潮を反映したものであったのである。それでは何故、1945〜46年中盤にかけて新聞や雑誌などのメディアを通じて全米に発信された被爆地関連のルポルタージュや手記がハーシーの『ヒロシマ』ほどに話題性を持たず、人々の記憶に鮮烈な印象を残さなかったのか。リフトン・ミッチェルに至っては、1940年代後半の米国のメディアの動向に対し、「原爆投下の問題について十分な議論を行なつてこなかった」とまで指摘している。しかし実際には、多角的な視点から原爆投下問題に意義を唱え、時には人々に被爆地／被爆者への想像力を馳せるよう仕向けたテクトが存在したことはこれまでに分析してきた通りである。この点に関しては、当時の歴史的な脈を考えたとしても非常に多様な解釈が考えられるが、現段階で考えうる要因の一つとしては、「広島・長崎への原爆投下」という事件が米国史上前例をみない出来事であったためであるということ指摘したい。歴史学者のエミリー・ローゼンバーグ (Emily S. Rosenberg) は、「パールハーバー」という用語が第二次大戦中の米国民の間で強力なレトリックの供給源となりえたこと背景に、「前もつ

て存在した、人々にとつておなじみのストーリー」が参照されていたことを指摘している<sup>64</sup>。このことはパールハーバーの記憶のみではなく、第二次大戦に関する幅広い事象に適用できるし、ひいては『ヒロシマ』のセンセーションを考える上でも同じ構図が当てはまると言えるだろう。すなわち、依拠すべき「参照枠」が存在しない故にモリソン／マンフォード／FCCによるテキストは、人々が広島・長崎を記憶する媒体には成り得なかったのではないだろうか。しかしながら、まさにこれらテキストによって、1945〜46年中旬にかけ、広島・長崎の物語が生成されていたことは事実であり、こうしたテキスト群によって具体化され、反復され、流布した物語が存在したからこそ、『ヒロシマ』は非常に大きな反響を呼んだのである。そしてこれらブレテキストが強調し、流布させた「個々人の生への希求」、「独自の規範に基づいたモラルの奪還」といったメッセージやストーリーが、被爆者を「イエロー・ペリル」という典型的な日本人としてではなく、また無数の集合体としてではなく、被爆地／被爆者に向ける視線のベクトルを「個」としての人間、具体性を持った生命体として見るという方向に向かわせた、という可能性は否定できない。

## 注

- 1 Web. NYU Journalism Institute <http://journalism.nyu.edu/century/> (二〇一三年九月二十一日アクセス)
- 2 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 87-88.
- 3 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty*

*Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 86-92.

- 4 Sharp, Patrick B. "From yellow peril to Japanese wasteland: John Hersey's 'Hiroshima.'" *Twentieth Century Literature*, Winter 2000; 46, 4: 434-450.

5 Boyer, Paul. *By the Bomb's Early Light: American Thought and Culture at the Dawn of the Atomic Age*. New York: Pantheon, 1985: 204-210.

- 6 下河辺美知子「トラウマの声を聞く 共同体の記憶と歴史の未来」みすず書房、二〇〇六年、一七二頁。

7 ジョン・ハーシー『ヒロシマ』(初版一九四九年、法政大学出版局、二〇〇三年)、五十九頁。

- 8 同上、六十六〜六十七頁。

9 Yavenditi, Michael J. "John Hersey and the American Conscience." In *Hiroshima's Shadow*, Eds. Kai Bird and Lawrence Lifschultz. Stony Creek, CT: The Pamphleteer's Press, 1998. 尚、本論文の中で Yavenditi は、『ヒロシマ』は「発表当時のセンセーションとは裏腹に、社会を動かす力とはならなかった」という点を指摘した上で、それが当時のアメリカ人の原爆観と如何なる関係があるのか、という点について論じている。

- 10 同上。

11 繁沢敦子『原爆と検閲』中公新書、二〇一〇年。

- 12 「原爆ビル」より William Leonard Laurence とは別人である。

13 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 48.

- 14 Homer Bigart "A Month After the Atom Bomb." *Hiroshima Still Can't Believe It*" *New York: New York Herald Tribune*, Sept. 3, 1945.

- 15 William H. Lawrence "Visit to Hiroshima Proves It World's Most-Damaged City." *New York: New York Times*, Sept. 5, 1945.
- 16 Dower, John W. *War Without Mercy*. NY: Pantheon Books, 1986.
- 17 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 51.
- 18 Weller, George, Anthony Weller, ed., *First Into Nagasaki: The Censored Eyewitness Dispatches on Post-Atomic Japan and Its Prisoners of War*, New York: Crown Publishers, 2006.
- 19 Sharp, Patrick B. "From yellow peril to Japanese wasteland: John Hersey's 'Hiroshima'." *Twentieth Century Literature*, Winter 2000, 46, 4: 434-450.
- 20 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 35-36.
- 21 同上。75-78頁。
- 22 Lewis Mumford "Gentlemen, You Are Mad!" *The Saturday Review of Literature*, March 2, 1946.
- 23 同上。
- 24 Boyer, Paul. *By the Bomb's Early Light: American Thought and Culture at the Dawn of the Atomic Age*. New York: Pantheon, 1985: 200.
- 25 堀内一史『アメリカと宗教 保守化と政治化のゆくえ』中公新書、二〇一〇年、九十二、九十三頁。
- 26 同上。八十八、八十九頁。
- 27 Yavenditi, Michael J. "John Hersey and the American Conscience." In Hiroshima's Shadow, Eds. Kai Bird and Lawrence Lifschultz. Stony Creek, CT: The Pamphleteer's Press, 1998, 228.
- 28 Boyer, Paul. *By the Bomb's Early Light: American Thought and Culture at the Dawn of the Atomic Age*. New York: Pantheon, 1985: 211.
- 29 Lifton, Robert Jay and Greg Mitchell. *Hiroshima In America: Fifty Years of Denial*. NY: GP. Putnam, 1995: 88-89.
- 30 The Federal Council of Churches "Atomic Warfare And The Christian Faith." In Hiroshima's Shadow, Eds. Kai Bird and Lawrence Lifschultz. Stony Creek, CT: The Pamphleteer's Press, 1998, 491.
- 31 同上。
- 32 藤原帰一『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』講談社現代新書、二〇〇一年、九十八頁。
- 33 Alperovitz, Gar. *The Decision to Use the Atomic Bomb*. NY: Random House, 1995: 437.
- 34 エミリー・ローゼンバーグ『アメリカは忘れない 記憶の中のパールハーバー』法政大学出版局、二〇〇七年。尚、本文献に関しては、以下も参照した。藤田恰史「(研究ノート) 集会的記憶研究の理論と方法—エミリー・ローゼンバーグ『アメリカは忘れない—記憶のなかのパールハーバー』を中心に」文化継承学論集第6号。

#### 付記

本稿は第四〇回原爆文学研究会(二〇一二年十二月二十三日、於九州大学西新プラザ)にて発表した内容を基に改題・修正を施したものである。また、本稿は(財)日米協会、及び米国大使館が主催する「米国研究助成プログラム二〇一二」の助成を受けた研究である。